

2012年2月1日

国家戦略会議フロンティア分科会「幸福部会」に向けての参考資料

東京大学先端科学技術研究センター
バリアフリー分野教授
福島 智

幸福のカギを握る「自分」と出会うコミュニケーション

1. 「幸福」をどう把握するか

ある国家や社会を構成する一人一人の個人が心豊かに生活する。みんなが幸福を実感できる。そんな社会を目指すためにはどうすればよいだろうか。こうした問題を考える際、「幸福」という概念の構造や性格を考察する必要があるだろう。

幸福はむろん、最終的には優れて主観的な概念であり、個人的な価値観の問題だともいえる。しかし、それを踏まえた上で、国家・社会が取り組むべき施策は少なくないと思われる。以下、私の意見の概要を素描する。

2. 幸福をめぐる問題を、三つの「階層構造」で捉えてみる

「幸福」という概念をめぐる問題を考えるにあたって、便宜上、次のような三つの「階層構造」を措定してみてもどうか。

その基底を成す第1の「階層」は、いわば生物としての人間の生存を支える階層であり、適切な水準の衣食住の保障や身体の安全の確保、防災や減災の取り組みなど、人間の生存を十全に保つために必須の具体的・現実的取り組みのレベルである。

所得保障、公衆衛生や保健施策、医療・介護の制度など、基本的な社会保障制度の基盤整備、及び、基礎的な教育や職業訓練の機会の保障、広義の安全保障などが、このレベルの階層に含まれるだろう。

第2は、各人が自らの幸福をどのように捉えるかをめぐる階層であり、幸福観に関わる問題が含まれる。そのうち、まずこの第2の階層では、社会的・文化的に規定・影響される幸福観に関わる問題を考える。これは、ある個人が属する社会的・文化的コミュニティにおいて、支配的な、あるいは支配的と考えられがちな「幸福観の階層」だともいえる。

この「社会的に規定される幸福観」は、有形・無形に各個人の幸福観に影響を与えてしまっているのではないかと。つまり、この「社会的幸福観」が各人の価値意識にしみ込んでしまっていて、各人はそれを基準に自らの幸福の実現度を押し量ってしまうという傾向があるのではないかと私は考える。もしそうであれば、この第2の階層は、極めて危険

な性格を帯びているだろう。

なぜなら、これは、例えば「こうした状態にある個人であれば、この社会において、この程度の幸福度であるはずだ」といったように、幸福の実現度をステレオタイプに判断してしまう危険性を孕んでいると思われるからであり、「個人間の比較による相対評価的幸福観」とでもいうべきものだからである。

それは「大量生産され、マニュアル化された既成の概念」として、社会という外部環境から押しつけられる性格の幸福観である。しかしそれだけに、相当な強さの圧力を伴った性質の幸福観のレベルだと考えられる。

次の第3の階層も、各人の幸福観をめぐる階層だが、これは個人レベルの幸福観の階層として把握する。すなわち、それは、まさに個人において、かけがえのない存在として自己を肯定し、自らの「生きる歓び」を実感するという意味での幸福観、いわば、「絶対評価的幸福観」の階層として把握するということである。私はこの第3の階層の幸福観こそが重要だと考える。

3. 三つの「階層」の性格と相互関係

このように便宜上、幸福（観）を3層構造で把握したとき、まず基底を成す第1の「生存の保障」としての幸福の前提条件の整備については、国家・社会全体として最優先に取り組みねばならないだろう。その取り組みの内容・程度等については、様々な議論が想定されるものの、この取り組みの意義・必要性自体については、社会的合意形成は比較的容易になされ得ると思われる。

しかし、第2の階層はどうだろうか。これは幸福をめぐる社会・文化的価値意識の個人への浸透の階層であり、具体的・現実的には特定しづらい。目に見えにくい側面が大きいだけに、むしろ各人の幸福（観）への影響は根深いと思われる。

私は先に、第2の階層は「個人間比較による相対評価的幸福観」だと述べたが、ここでの「相対評価」という表現は、学校教育等における「偏差値」的学力評価システムからの連想による。つまり、まるで学力テストの「偏差値」のように「幸福の偏差値」を、この社会はどこかで暗黙のうちに想定してしまっているのではないか、という恐怖にも似た不安を私は抱くのである。

「偏差値」は、学力テストの点数が「正規分布」するという想定のもとに算出される。正規分布は、多数の事象が存在するとき、それらが平均値を境として、前後同程度にばらついている状態のことだ。平均値から離れば離れるほど、その事象の出現する確率は加速度的に小さくなるという性質を持つ。

つまり、これと同様に、偏差値的な正規分布によって、社会の構成員の「幸福度」を私たちは捉えてしまっているのではないかという恐れを抱くのである。

具体的には、「幸福度が極めて高い人」は数が少なく、「中間的な人」が比較的多く、極めて幸福な人の反意語としての「極めて不幸な人」は数は少ないものの、必ず存在す

る（存在して当然である）という分布モデルを、暗黙のうちに私たちは想定してしまっているのではないかということだ。そして私たちは、その想定に従って人の幸福観が配置されることを、どこかで所与の現実として受け入れてしまっているのではないかという懸念が生じる。

もしそうであれば、自己と他者の幸福は背反する関係にあることになる。すなわち、「幸福」は他者との協力によって生み出されるのではなく、むしろ他者との「競走」によって勝ち取るものだという、極めて孤立した排他的な概念として捉えられてしまうだろう。

4. どの「階層」を重視すべきか

もし、こうした理解を前提とするならば、幸福実現のためには、第1の階層を基盤としつつ、第3の階層に関わる取り組みが重要となるだろう。その一方で、第2の階層には極めて危険な側面が含まれているため、社会と個人の双方が常に自覚的に注意を払うべきだと考える。

なぜなら、第2の階層では「個人間比較」ないし「他者との比較」に左右されたり、その社会に支配的な「既製品としてのマニュアル的幸福観」を追求して、不毛な強迫的苦闘を強いられる可能性があるからだ。

また、第2の階層は幸福を「相対評価的」に捉えることによって、自己の幸福実現のためには他者との排他的な「競走」に勝ち抜くことが必須だと錯覚してしまうような危険性が含まれていると思われるからである。

従って、私たちはこの第2の階層の幸福追求に囚われることなく、自ら見出し、自ら作り出した幸福観をよりどころに、「手作りの幸福」を目指すという第3の階層の戦略を重視すべきだろう。言い換えれば、「自分が幸福だと感じられる状態を、他者との競争を通してではなく、他者との協力によって作り出す力」をこそ、育むことが重要だと私は考える。

なお、この第3の階層の幸福を追求するためには、第1の階層の社会的取り組みとも関わって、次のような価値観が社会の仕組みと個人の内面の中核を貫く中心軸として位置づけられるべきだと考える。それは、すべての個人の生存、つまりこの社会にあって「人が生きること」自体に最高度の価値と尊厳を見出す、という価値観である。

5. 本源的欲求としてのコミュニケーション

ところで、人の幸福にとって重要な意味を持つ営みに関して、従来必ずしも重視されてこなかったものがあるのではないかと、私は考える。それは、人の本能としての「コミュニケーション欲求」とでもいうべきファクターだ。

はるかな過去、猿人から人類へと進化する過程で、人は絶えず厳しい自然環境や猛獣などの脅威にさらされて生きてきたことだろう。人はこうした外敵との何百万年もの闘

いの中で、外部世界を認識し、概念化していく力を身に付けていったに違いない。

そして、十万年程度から数万年前には、言語を「発明」したとされる。最初は狩猟や採集のための共同的労働の便宜を図るためや、猛獣などへの威嚇、仲間の助けを求める伝達手段、その他生存維持に必須の情報を交換するための「手段」としての会話だったかもしれない。しかし、私はコミュニケーションがこうした「手段」としてのみ発生し、「手段」としてのみ維持・発展してきたとは言い切れないのではないかと考える。

たしかに、原初の人類は当初、うなり声のような音声なり単純な身振りでの言語・コミュニケーションを、生きるための「手段」としてもっぱら使っていたのかもしれない。しかし、それだけではなく、おそらく人間には、本能的・生得的にコミュニケーションへの欲求があるのではないだろうか。そう仮定しなければ、これほどまでに豊かな内容と複雑な多様性を内包した「言語」を、人類が作り出し、発展させてきたという現象の説明が困難だと私には思える。

話とはぶが、私は9歳で失明し、18歳で聴力を失い盲ろう者となった。盲ろう者の状態とは、かのヘレン・ケラーと同じ障害の状態だ。

私が盲ろう者となって最も辛かったのは、景色が見えなくなったことでもなく、音楽が聴けなくなったことでもない。それは、他者との直接的コミュニケーションが極めて困難になったということだった。ここでいう「コミュニケーション」とは、単なる「情報」の入手や交換とは異なる。

例えば、私は盲ろう者になっても点字で読書をしたり、文通をしたりすることは可能だった。いまなら、さしづめ、点字のシステムを利用できるパソコンでの電子メールのやり取りに熱中していたことだろう。ところが、当時の私はいくら点字の本を読んでも、友人たちと何通もの手紙をやり取りしても、一向に孤独はいやされず、乾ききった心に潤いは訪れなかったのである。

私が盲ろう者としての「再生」を実感できたのは、周囲の人たちの協力を得て、指点字という方法を使って、他者との生きたコミュニケーションを復活させることができたからのことである。なお、こうした盲ろうの状態での極限の孤独感と、コミュニケーションを取り戻すことでのそこからの「復活」の事例は、私一人に特有の経験ではない。盲ろう者になってからのおよそ30年間に、国内外を問わず、これまで私は数え切れないほど同様の盲ろう者の体験事例を見聞してきている。

もっと一般的で、身近な例を考えることもできる。例えば、赤ん坊は非言語的な段階のコミュニケーションも含め、他者との交流を大変喜ぶ。たしかに、泣き声などには様々な種類の要求や不快感を周囲に訴えるという「手段的側面」があるだろう。しかし、他者との交流に伴うはじける笑いや喜びは、何らかの目的達成のための「手段」であるというよりも、そのコミュニケーション自体によってもたらされる喜びだと考える方が自然ではないだろうか。

ところが、現代社会では、こうした自然な欲求としてのコミュニケーションのあり方

が変質してきているのではないかと私は考える。すなわち、端的に表現すれば、コミュニケーションの「具体性」が「抽象化」され、「目的」が「手段化」され、「身体活動性」が希薄となり、「相互コミュニケーション」から（電子メディアを通した）「外部の情報・知識の入手」へと、社会的コミュニケーションの基調が変質してきたのではないかとと思われるのである。

6. 現代日本の言語・コミュニケーションの性格

さて、では、現代日本に生きる私たちを取り巻く言語・コミュニケーションの状況は、私たちの幸福にどれほど貢献しているのだろうか。

私はかつて、現代日本における言語・コミュニケーションを取り巻く状況について、若干の考察を試みた。ここでは、ごく概括的な、また断片的な素描をご容赦いただきたい（詳細は、福島『盲ろう者とノーマライゼーション』明石書店（1997）pp. 186-228）。

私はその考察において、言語・コミュニケーションを便宜上、次の三対のファクターで把握し、その上で、それぞれの対における前者のファクターが減少し、後者のファクターが増大している傾向があると考えた。

すなわち、現代社会における言語・コミュニケーションをめぐる状況は、

第1に、「具体性（直接性）→抽象性（間接性）」へと移行し、

第2に、「それ自体喜びを伴う目的→なんらかの実利的目的達成のための手段」へと移行し、

さらに第3に、「他者との相互コミュニケーション→外部世界に関する情報の入手」へと、

それぞれウエイトが移行してきているのではないかと考えたのである。

当該拙著を刊行した1997年から15年が経過した現在、日本社会の状況はどのように変化しているだろうか。

私見では、前述の三対のファクターの「前者から後者へのウエイトの移行」という傾向は、様々な領域で依然として存在していると考えられるものの、それとは逆のベクトル、つまり「後者から前者への揺り戻し」の動きも同時に存在しているように思われる。

7. 「自分」と出会うためのコミュニケーション

たしかに、15年前と比較して、とりわけ情報・コミュニケーション技術（ICT）の驚異的な進歩と普及によって、現代日本は当時よりも人間関係がさらに抽象化され、間接化された面があるだろう。また、インターネットの普及により、私たちは動画を含め、事実上無限の情報を入手することができるようになった。さらに、そうした「情報」だけでなく、様々な形態の「コミュニケーション」自体が商品化され、巨大な消費市場を形成している。

こう考えると、例えば、電子メディア上では、コミュニケーションは、一見「目的→

手段」に移行したかのように思えるけれど、それとは逆の方向も、同時に強まっているのではないか。つまり、携帯端末を含めたネット上でのコミュニケーションは、今や何かのための「手段」を超えて、それ自体が「目的化」している、「目的化」せざるを得ない側面が存在するのではないかということである。

なぜ、こうした一見矛盾したような両方向の傾向が同時に存在するよう感じられるのだろうか。個人がばらばらに引き裂かれてしまっているかのようなこの時代だからこそ、例えば、携帯電話や各種モバイルがこれほど爆発的に広がったということなのだろうか。

もちろん、そうした側面もあるだろう。例えば、物理的に近接した対面での直接的なコミュニケーションには、一定の緊張と、時には一定の危険をも伴う。それゆえ、直接的コミュニケーションは徐々に忌避されてきているのかもしれない。あるいは気心の知れた友人や仲間と物理的距離の近さとしてではなく、電子メディアを通した「超物理的距離」、ないし「心理的距離」の近さによって、「繋がりたい」という傾向が生じているということなのだろうか。

仮にそうした側面があるとしても、私には、それだけが理由とは思えない。なぜか。

前述したように、かつて、私は盲ろうという障害ゆえに、コミュニケーションをほぼ喪失する体験をした。そのとき感じたのは、コミュニケーションの希薄化や喪失は、実は他者との関係性の希薄化や心理的孤絶感の深まりといった状況を作り出すだけでなく、より深刻な問題、より深い苦悩を私にもたらすということだった。それは、「自分自身との距離」が大きくなるとでも表現するしかないような感覚だ。言い換えれば、「自分が生きているという実感の消失」に似た感覚に襲われたということである。

私がこうした体験を通して得た認識は、自分一人では人は自分の存在やその存在の意味を感じられないのではないか、ということである。他者との交流によって、そこに反射され、映し出される「影」としての自分自身の存在を見出すことによって、人は初めて自分自身を認識するのではないだろうか。（詳細は、福島『盲ろう者として生きて』明石書店（2011）参照）。

従って、人が他者と交流したいと思うのは、実際は他者のために交流したいというよりも、むしろ、自分自身の存在を確かめたいからなのではないか。こう考えるとき、「自分」と出会うための他者とのコミュニケーションの存在は、幸福の概念の重要な部分を構成するものではないかと私は思う。

8. 今後の取り組みのあり方

今後、ICTの発達と多様なコミュニケーションツールの進歩は、加速度的に進むだろう。それは一方で、人と人との多様で新たな結び付きをもたらす重要なメディアだともいえる。しかし、他方でそれは「自分自身の存在と出会うための他者とのコミュニケーション」の深まりにとっては、必ずしもプラスに働かない面もあるのではないだろうか。

もし人が生きる上で、自分自身の存在に対する手応えと、自分の存在価値を無条件に肯定するという欲求が重要なのであれば、「自己肯定」に繋がるコミュニケーションのあり方、そうしたコミュニケーションを培う仕組みや制度設計、教育や労働分野を含めた社会・文化の豊穡化を目指す取り組みが重要になってくるだろうと思われる。

現代の ICT は情報収集に強力な性能を発揮し、視覚と聴覚についてはほとんど無限の情報が瞬時に得られるツールだといえる。遠隔通信の側面でも、かつて手紙だけだった時代から、電信、電話・ファックスへと発達してきた手段は、音声と文字を経て、今や音声・文字・画像・動画を多重的に同時に送受信できる時代となった。

さらに、ヴァーチャルリアリティ技術の発達により、疑似的な触覚やある種の香りの情報も伝わる時代も近いかもしれない。

私はこうした ICT の爆発的進歩と普及を一方で肯定的に評価する。例えば、各種 SNS は人と人との新しい関係性の構築に無限の可能性を切り拓きつつある。

ただし、あえて次の 2 点を私は指摘したい。

第 1 に、電子情報と電子コミュニケーションが人の認識世界を過剰に占有するようになったとき、おそらく私たち人間の認知・認識の枠組は重要な岐路に立たされるだろう。すなわち、「現実とは何か」自体が問われるということである。

第 2 に、このことと関わって、知的・言語的経験と生活実感との乖離の危険性が挙げられる。

例えば、古来読書によって得られる無限の言語的知識、すなわち、間接的な知的経験は、人間の知的諸営為の源泉であった。しかし、もし読書がまさに読書だけに完結したとすれば、その知的経験は現実の生活や人間社会の改革に繋がらず、無意味なものになってしまったであろう。

ある個人が読書を通して得る「無限の間接的・知的経験」は、当該個人がそれと同時に、「有限だが、直接的で感覚的な経験」を持つことによって、初めて意味をなすのではないか。

私はこの 2 点が今後の日本社会における幸福度を充実させる上で、大切なカギを握るのではないかと考えている。

具体的には、例えば、保育や小学校教育段階からの、多様な属性をまとった人との多様なコミュニケーションの体験を重視することである。そして、それは情操教育や早期教育といった「何かのための手段」として行うのではなく、「他者とのコミュニケーション自体を楽しむ力を育む」ことを目的に据えるということである。

このほか、年齢を問わず、全ての個人が他者とのコミュニケーションや繋がりを持ちやすくするための社会的インフラの整備が求められる。保育や学校教育の質と形態の多様化をはじめ、各種相談事業、セルフヘルプ事業の支援、様々な NGO・NPO の自主的活動の支援など、国、自治体、企業、市民団体、個人が相互に繋がりネットワークを形成して行く取り組みが切望される。

「間接的で、無限の視聴覚情報」から、「直接的で、有限の五感体験」へのシフトが重要であり、「電子メディアのネットワーク」偏重の社会から、「一人一人の生きる豊かさと尊厳を支え合う人間のネットワーク」を育む社会への改革が、日本の未来を切り拓く道なのだと私は考える。